

# BOOK WATCHING

# ブックウォッチング

## 街の本屋さん

### 長谷川書店ネスパ店

(神奈川県茅ヶ崎市)

「長谷川書店、知ってますか？」。サザンオールスターズが2000年夏、桑田佳祐さんの故郷・茅ヶ崎で凱旋コンサートをしたとき、桑田さんは観衆にこう尋ねた。昔からなじみの本屋さん(南口駅前店)が掲げた「お帰りなさい、桑田さん」の看板をどうやら見てくれたようなのだ。

「あの時は私たちが本当に感激しました。復活したサザンがまもなく茅ヶ崎でライブをやるので、もしかしらまた、って楽しみにしています」。真夏の太陽がまぶしい湘南の地で、長谷川静子店長は声を弾ませる。

静子さんは大学で経済を学び、金融機関に3年勤めた1992年、同書店がJR茅ヶ崎駅北口の隣接ビルに開いたネスパ店の店長になった。「書店の娘なのに経営は何も知らない素人」だったが、「本は心と頭の栄養」を台言葉に工夫を重ねた。

### 月1「おはなし会」180回目

長谷川書店ネスパ店(神奈川県茅ヶ崎市元町1の1、☎0467・88・0008)。年中無休。平日と土曜は午前9時半〜午後9時(日祝日は午後8時半まで)。同書店は1947年創業、静子さんの父義剛(よしたけ)さんが2代目社長で、茅ヶ崎駅南側にも本店など2店舗を展開。「絵本とおはなし会」は20日に180回目を迎える。



絵本 児童図書コーナーの前でほほえむ長谷川静子さん

## 人を育て、文化を創りたい

1階はビジネス書や人文、歴史の書棚に独自性を発揮する大人のフロアだ。「湘南では最も本屋らしい品ぞろえ」とベテラン編集者もうなるほど。「文明―西洋が覇権をとれた6つの真因」「戦後史の正体」それでも、日本人は「戦争」を選んだ」などの書名が見える。ビジネスの書棚には「競争の戦略」「失敗の本質―日本軍の組

織論的研究」など経営者向けの本が収まっている。一方、2階は絵本や図鑑など児童図書コーナーを入り口に設け、「このなつ何冊読めるかな」と書いたポップを掲げる。小学校低学年向けの「メガネをかけたら」(小学館)、「なみだひっこんで」(岩崎書店)、「わたしのいちばんあのこーばん」(ポプラ社)、

「いっしょだよ」(アリス館)など今年の青少年読書感想文全国コンクールの課題図書が並ぶ。ネスパ店の神髄は6階の催事場(約73平方メートル)で開く独自企画だ。開店当初に反響を呼んだのは「星野富弘詩集&カレンダー展」だ。突然の事故で手足の自由を奪われながら、口にくわえた絵筆で詩画集の創作を続ける星野さんの作品

に「客は心のふるさとに会えた」と感動し、展示会は毎年続く。さらに97年9月、学級崩壊の二

ユースに心を痛めた静子さんが「子どもの心が豊かになるような機会を」と始めた「絵本とおはなし会」は16年間、毎月1回、無料で開催している。第3火曜の午後3時、小さい子ども連れの母親がフロアマットに腰をおろし、親子でボランティアの女性の読み聞かせに耳を傾ける。

大人向けの企画として2007年に「紙芝居実演者養成講座」を開いたところ、受講者が紙芝居サークルを結成し、学童保育や老人ホームで出張公演をするようになった。09年に始めた「大人の塗り絵体験教室」も人気で、昨夏は開店20周年企画として「大人の塗り絵コンテスト」を行い、応募作を展示して喜ばれた。

「本屋は人を育て、文化を創ることが最大の使命」と語る静子店長の挑戦は続く。【城島徹写真も】

### 定休日のポスター

た毎回違うメッセージと絵が人気を集めている。ポスター見たさに「定休日」に人が集まるという話もある。「また転んだ、また失敗した、そこから人生は始まるのです。そんな本があり生きるのがいやになったとき、読む本があり、一緒に探してみよう」。最も印象に残ったメッセージだ。「本を読まない人は翼を失った鳥です。ほんまやで」「本は私にとって人生そのもの。読書は息をするのと同じこと」など書籍への思い入れが気持ちいい表現で語られている。(涼)

### @現場

仕事帰りに立ち寄る店がある。学生街に住んでいるため近所に古書店が多い。新刊書店にはないドキドキ感を求めてふらっと寄ってみる。何軒か回ると、この一冊という運命を感じる本に巡り合う。だから古書店通いはやめられない。

古書店好きの私がいつか訪ねたいのは大阪市北区の「青空書房」。今年90歳になった店主のさかもとけんいちさんの「ほんじつ休ませて戴きます」(主婦の友社)を読んだからだ。週1回の定休日に張り出される手書きのポスターに描かれ

### これからお祈りにいきます



(津村記久子著・角川書店・1470円) シゲルの父は不倫中、弟は不登校、母ともうま〜いかない。そんな中で神様に「体のこの部分だけは取られたくない」と申告する奇妙な祭りが始まる。関西弁まじりの軽妙な文体を駆使した二つの中編を収録。

### 兼農サラリーマンの力



(古屋富雄著・栄光出版社・1470円) 「兼農サラリーマン」とは、サラリーマンをしながら農業をする人のことを指す。著者はこのシステムが「日本の農業を救う」という。すでに取り組んでいる神奈川県南足柄市のケースなどを紹介する。

### パラオの恋 芸者久松の玉碎



(新井恵美子著・北辰堂出版・1890円) 太平洋戦争の激戦地だったパラオ・ペリリュー島。銃を手に米軍と戦い、死んでいった女性、久松。果敢な戦いぶりに、米兵は「ジャンヌ・ダルクのようだ」と評したという。そんな久松の生き様を追う。

### 法服の王国 小説裁判官 上下

(黒木亮著・産経新聞出版・各1890円)



最高裁判所総局などエリートの間を歩む津崎、信念を曲げることなく地裁・支部勤務を続ける村木。修習同期の2人の裁判官を軸に、裁判所の内部を赤裸々に描く。美名の登場人物も多く、戦後の裁判所の歴史をまとめたノンフィクションのようにも読める。「裁判所は憲法を守る砦なのか」。小説が問うテーマは大きく、そして重い。

### 新刊

### 世界地図の下書き

(朝井リョウ著・集英社・1470円)



交通事故で両親を亡くし、児童養護施設で暮らすことになった太輔。そこには、母から虐待を受けた少女ら、悩みを抱えた仲間がいた。施設を去る高校生の佐緒里のために、4人の小学生がある「作戦」を企てる。「いじめられたら逃げればいい。逃げた先にも同じだけの希望があるはず」という熱いメッセージが伝わる直木賞受賞後第1作。

### 「在宅死」の心がまえ

(松永安優美著・ポプラ社・1050円)



著者は内科医で介護施設の運営者。病院でなく自宅や介護施設で人生の終末を迎える時代に備えることの大切さを、豊富な経験から説く。「幸せな最期」につながる在宅介護のありかたなどを解説する。

### 見逃さないで！ 子どもの心のSOS

(明橋大二著・1万年堂出版・1365円)



子どもを巡る問題の根っこには「自分は誰からも必要とされていない」という自己肯定感の低さがある。スクールカウンセラーとしていじめ対策に関わってきた著者が、子どもが発する切実な声への対応法を説く。